

# 日本語のナラティブにおける 評価方略の分類に関する一考察

— 抽出基準と分類基準に注目して —

陳 真  
(2019年10月3日受理)

Classifying Evaluative Strategies in Japanese Narratives:  
Extraction and Classification Standards

Zhen Chen

**Abstract:** Story tellers have been found to use a variety of evaluative strategies to express their judgments and perspectives while telling a story. However, the classification of strategies varies among studies in the literature, which makes it difficult to compare these studies or apply the strategies to new sets of data. These studies were mainly conducted in English; thus, classifications based on English forms cannot be used in other languages. The present study aims to establish a valid and reliable classification of evaluative strategies. Twenty-nine native Japanese speakers were asked to narrate a picture story, “*Frog, Where are You?*”, and evaluative clauses and phrases in the narratives were extracted based on the linguistic forms. Evaluative clauses and phrases were then classified based on the functions they serve in their immediate context. More specifically, evaluative clauses were categorized into four types: (a) references to “frames of mind,” (b) references to judgments, (c) references to intentions, purposes, etc., and (d) references to hypotheses, guesses, etc. Evaluative expressions were categorized into five types: (a) references to “frames of mind,” (b) references to judgments, (c) attitudes, (d) information complement, and (e) relationships of events or background information. This classification provides a more reliable and objective framework than measures used in previous studies.

Key words: narrative, evaluative strategies, linguistic forms, classification

キーワード：ナラティブ、評価方略、言語形式、分類

## 1. はじめに

人間関係を維持する交流会話の場面では、自己体験や最近起こった事件の話など、過去に起きた出来事を語る事がよくある。ナラティブとは、一連の出来事

---

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：畑佐由紀子（主任指導教員）、柳澤浩哉、  
永田良太

について語る談話であり、このような語りの典型例ともいえる(南, 2005)。ナラティブを語る際、話者は様々な手段を用いて、話の面白さ、臨場感、話者の観点などを表す。これを評価方略という(Labov, 1972; 辻, 2013)。第二言語学習者にとってナラティブを語る能力は、母語話者との有効な人間関係を構築するために重要であるが(小口, 2017)、学習者の場合、自らの気持ちや観点を適切に伝えることは難しいといわれている(Minami, 2004; 鳥, 2012)。

日本語学習者が自らの気持ちや観点を伝える際にか

かえている問題点を解明するためには、学習者と母語話者の評価方略の使用実態を比較するのが有効であると考えられる。しかしながら、評価方略の使用実態を分析する枠組みは、英語のナラティブに基づいた研究がほとんどであるため、英語以外の言語に応用するのは困難である。また、研究によって評価方略の分類が異なるため、研究結果を比較し、全体像を探ることが難しい。

そこで、本稿は、日本語学習者が評価方略を使用する際の問題点をより正確に、具体的に把握することを目的に、信頼性・客観性を保証でき、かつ使用しやすい評価方略の分類について検討する。

## 2. 先行研究

### 2.1 ナラティブにおける評価方略

ナラティブは、「背景節」、「出来事節」、「評価節」により構成される。背景節は、人物、場所、時間、場面などに関する情報を表す部分であり、例えば、「彼女は12歳ぐらい」といった節がこれに当たる。出来事節は、「彼女は私をひどく殴ってしまった」など、何が起きたのかを語る部分である。評価節は、「本当に納得できないね、私」といった表現にみられるように、話し手や登場人物の気持ち、観点を集中的に表す部分となる (Labov, 1972)。

評価方略とは、話者や登場人物の態度、立場、観点や感想を示す手段である。例えば、「彼はずっとプランを延期している」という節では、「ずっと」は延期期間が長いことを強調する表現であり、話し手の不快感や非難を示す評価方略といえる (Hunston & Thompson, 2000)。

先行研究では、評価方略を分析するための言語形式として、評価節 (Evaluative clause) と評価表現 (Evaluative expression) の2種類が採用されている (Peterson & McCabe, 1983)。評価節は、一文あるいは一発話からなり、それだけで命題を構成する。評価節は、会話や談話の流れを一旦中止させ (Labov, 1972)、話者や登場人物の心理的な活動を述べることで、聞き手に感想や観点などを示す。一方、評価表現は、発話や文の一部に出現し、その発話や発話の一部に対する評価を示す (Labov, 1972)。評価表現は、話の流れを止めるのではなく、ヘッジを示したり、発話の一部に評価を加えることによって情報をより豊かにしたり、発話内容の信憑性を表したり、聞き手の注意を発話内容に向けさせたりする。

評価表現は、発話の主要な内容に対する評価を示すため、背景情報節、出来事節、評価節のすべてで使用

されうる。例えば、「そこで結構長く戦ったよ」という出来事節で、「そこで長く戦った」は出来事を表す節の主要部である。一方、「結構」は「戦った時間の長さが十分であった」という話し手の感想を表す評価表現である (Labov, 1972: 379)。また、男の子と犬が水に落ちた場面に対する、「“あ、バッドエンドになるかもしれない”って思ったんですけど。」という発話は、結果が良くないという登場人物の判断を示す評価節である。この場合、「バッドエンドになる」は登場人物の当該場面に対する評価を表す主要部である。しかし、これ以外にも、登場人物の観点や気持ちを表す評価表現がこの発話には見られる。具体的には、感動詞、「あ」は登場人物の驚きを、「かもしれない」は悪い結果が起こることに対する登場人物の不確かな気持ちを表す評価表現である。

これまで、多くの研究者により評価節と評価表現それぞれについて評価方略の分類が検討されてきた。しかし、分析の観点は研究によって異なり、分類の方略も「心的状態」、「判断」、「意図」など多岐にわたる。

### 2.2 ナラティブにおける評価方略の分類

英語の評価方略の研究では、主に Labov (1972) と Peterson & McCabe (1983) の枠組みが用いられている (Kang, 2003; Minami, 2004; Reilly, 2001; Chen & Yan, 2011)。

Labov (1972) は言語形式をもとに、英語のナラティブにおける評価方略を分類し、ナラティブを構成する節の基本的な統語パターンは、「接続詞+主語+助動詞+動詞+補語+様態副詞+場所を表す副詞+時間を表す副詞とフレーズ」であると主張した。このパターンをもとに、それ以外の言語形式を評価方略として抽出し、評価節と評価表現に分類した。その際、評価節については「自分の言葉を引用して、出来事を評価する」、「第三者の言葉を引用して、出来事を評価する」など機能的に分類しているが、評価表現は「数量詞」、「進行形」、「法助動詞」など形式によって分類しており、評価表現がどのような機能を果たすかについては分析しておらず、分類基準に一貫性がない。また、この分類は英語の言語形式をもとにしているため、ほかの言語に用いることは難しい。

これに対して、Peterson & McCabe (1983) は評価の意味内容に着目して、英語のナラティブの評価方略を抽出し分類した。そして、評価方略には、「オノマトペ」、「程度を表す副詞」、「繰り返し」、「意図、目的、願望、希望」、「内在的な心理状態」などがあるとしている。この分類は、評価の意味内容を対象としているため、他の言語にも応用可能である。しかし、「内在的な心理状態」や「意図、目的、願望、希望」は評

価節、「オノマトペ」や「程度を表す副詞」は評価表現とされており、形式的側面は重視されていない。さらに、「オノマトペ」や「内在的な心理状態」など形式と意味内容が混在する項目や意味内容だけが示された項目もあり、意味内容にもとづく分類とはいえ、統一された基準とはいえない。

日本語については、Küntay & Nakamura (2004) が意味内容に基づいた評価方略の分類のうち、出現頻度が高いものに注目し、日本語のナラティブに対応する言語形式を分析した。そして、心的状態と対応する言語形式としては、「怖い」や「驚かす」といった感情状態を表す形容詞や動詞、ヘッジの言語形式としては、「みたいな」というモダリティ表現、「多分」という陳述副詞があると報告している。また、豊かさを増やす表現として、「また」、「急に」、「とても」という副詞、「でも」、「しかし」という逆接関係を表す接続詞、そして繰り返しがあると述べている。しかし、この研究では、評価方略と対応する言語形式をどのように選別したのかについては言及されていない。

### 2.3 問題の所在と本研究の目的

英語のナラティブの評価方略の研究では、言語形式と評価の意味内容に着目して分類がなされているが、その分類基準は統一されておらず、形式と内容の混同がみられた。一方、日本語の評価方略の分析では、使用頻度の高いものに偏った研究がなされているだけで、ナラティブの評価方略を分類する適切な方法については検討されていない。

そこで、本稿では、客観的で信頼性の高い評価方略の抽出基準と分類基準を検討する。そしてこの基準をもとに、日本語のナラティブにおける評価方略を分類する。具体的には、以下の2点を研究課題とする。

研究課題1 日本語のナラティブにおける評価方略の抽出基準と分類基準はどのようなものか。

研究課題2 日本語のナラティブにおける評価方略の分類はどのようなものか。

## 3. 研究方法

### 3.1 データ

本稿では、調査材料として、24枚の絵からなる“Frog, where are you?” (Mayer, 1969) という絵本を用いた。この絵本は絵のみが描かれており文字はない。内容は、犬とともに暮らしている男の子が逃げ出したペットの蛙を探しに出かけ、途中でハチ、フクロウなどの動物と出会い、犬と一緒にいくつもの困難を乗り越え、最後に無事に蛙を見つけるというものである。この絵本を選択した理由は以下の3点にある。まず、文字がな

い絵本をもとに産出されたナラティブは、話し手の自由度が高いと考えられる。次に、物語には様々な場面展開が描かれており(鳥, 2012)、多様な評価方略が使用される可能性が高い。最後に、内容が明確であるため、背景情報や出来事と、評価方略の区別がつけやすいためである。

調査協力者は、20代の日本語母語話者の大学生、女性(JNS-F)18名と男性(JNS-M)11名である。調査は静かな部屋で個別に行い、以下の手順をとった。まず、絵本の絵を見て話を理解するために話し手に18分程度の時間を与えた。その際、自分の理解を整理するためにメモを取ることを認めた。その後、絵本を見たことがない聞き手に対して、絵本やメモを見ないでできるだけ詳しく物語を話すよう指示した<sup>(1)</sup>。聞き手は20代の女性の日本語母語話者12名<sup>(2)</sup>で、語りを妨げないよう、簡単な相槌や頷き以外はしないように指示した。調査中、聞き手からの質問はほとんどなかった。また、調査中の会話をICレコーダーで録音した。

### 3.2 データ処理

録音した音声データは2名の母語話者が文字化した。文字化の信頼性を、以下の手順により保証した。まず、全データの20%を無作為に抽出し、2名の母語話者に文字化させ、一致率を求めた。その結果、一致率が96.7%であったため、残りのデータを2名で別々に文字化させた。

次に、評価方略を抽出しやすくするため、文字化されたナラティブを「節<sup>(3)</sup>」に区切った。その際、まず日本語教育を専門とする2名の母語話者に20%のデータを処理してもらい、一致率を算出した。その結果、93.3%の一致率が得られたことから、残りのデータは1名の母語話者に区切ってもらった。

## 4. 結果と考察

### 4.1 日本語のナラティブにおける評価方略の分類過程

評価方略の分類には、抽出と分類という2段階があり、それぞれ一定の基準に従って行われる。具体的には、ナラティブの評価方略を抽出基準で引き出した上で、分類基準に基づき類型化するというものである。しかし、評価方略の抽出基準と分類基準は先行研究によって異なる。本節は、先行研究の問題点を分析した上で、研究間でずれが生じないような客観性と信頼性を保証できる評価方略の抽出基準と分類基準について再検討する。

#### 4.1.1 評価方略の抽出基準

第2節でも述べたように、ナラティブには、評価方略を示す言語形式として評価節と評価表現がある。表

1は、先行研究で提案された評価節と評価表現の抽出基準と結果を表したものである。

表1 先行研究における評価方略の抽出基準と結果

評価方略の言語形式	抽出基準	結果
評価節	統語パターン以外の言語形式 (Labov, 1972)	引用節など
	評価の意味内容 (Peterson & McCabe, 1983)	引用節、内容から離れている節など
評価表現	統語パターン以外の言語形式 (Labov, 1972)	数量詞、将来形など
	評価の意味内容 (Peterson & McCabe, 1983)	数量詞、メタファー表現など

表1に示すように、Labov (1972) は、ナラティブを構成する節の統語パターン以外の言語形式と定義し、これに当たる評価方略を抽出した。その結果、引用節などを評価節、数量詞、将来形などを評価表現として抽出した。しかし、この「単一の統語パターンを決める」という方法は、日本語のナラティブには応用しにくい。例えば、英語で進行中などを表す「-ing」は評価方略の言語形式にあげられているが、日本語でそれと対応する「テイル」は反復、完了や状態などの様々な意味を表すため、必ずしも評価方略とみなすことはできない。

これに対して、Peterson & McCabe (1983) は、「評価方略とはナラティブの背景情報や出来事に対し、話者や登場人物の態度、立場、観点や感想を示す手段」と定義し、この基準を用いて評価方略を抽出している。また、Peterson & McCabe (1983) は、評価内容に基づいて評価方略を抽出しているため、Labov (1972) とは抽出方法が大きく異なり、抽出される評価方略も異なる。例えば、Labov の分類では、内容面で評価効果を果たす表現は抽出できないが、Peterson & McCabe の分類では、メタファー表現など、物語の内容について評価効果を果たす表現が抽出できる。しかし、Peterson & McCabe の抽出基準の詳細は不明であり、抽出範囲が恣意的になりやすい。そのため、客観性の高い抽出基準になっているとはいえない。

また、評価の意味内容をもとに評価方略の言語形式を分析した先行研究では、「怖い」という話し手や登場人物の気持ち、観点を描写した表現だけではなく、

「とても」のように程度を表すことで、話し手や登場人物の気持ち、観点を伝える表現などを評価方略とみなす研究もある (鳥, 2012; 小口, 2017)。話し手や登場人物の気持ち、観点を描写した表現については、どの研究でも抽出されているが、程度や様態を表す評価表現などは間接的に気持ちや観点を表すため、判断が主観的になると考えられる。そのため、評価表現がどのような特徴で気持ちや観点を表すのかを分析し、抽出基準をより明確にする必要がある。

評価表現が有する特徴として、Hunston & Thompson (2000) は「比較性」、「主観性」、「価値観負荷性」の3点をあげている。比較性とは、話し手が評価する対象を社会の標準的な状態、または行動の規範と対比することを指し、程度を表す副詞などがこれにあたる。主観性は、ナラティブの出来事または背景情報に対する話し手の主体的反応を示し、感情状態を表す表現などが用いられる。価値観負荷性は、話し手が自分の価値観に基づいて判断することを意味し、良し悪し判断を表す表現などを用いて表される。

以上を踏まえ、本稿では、まずナラティブを、その構成要素である背景情報節、出来事節、評価節の3つに分類し、それぞれの節が示す内容の種類を示す。表2は、本稿のデータで観察された背景情報節、出来事節、評価節の具体例とその種類を示したものである。

表2 背景情報節、出来事節、評価節の具体例と種類

中心的な内容	具体例	種類
背景情報	多分英語圏の、アメリカかな? の絵本なんですけど。(JNS-F11: 3) <sup>(4)</sup>	絵本に関するメタ的な説明
	そこはフクロウの巣で。(JNS-M08: 20)	時間、場所や人物関係などに関する説明
	蛙の夫婦がいて。(JNS-F13: 28)	登場人物の状態
	こう瓶割っちゃって。(JNS-M05: 24)	物の変化
出来事	逃げ出してしまいました。(JNS-F08: 6)	登場人物の動作
	あとその、男の子が1人一生懸命あの、色んなところ探してる間。(JNS-F05: 48)	登場人物の動作の持続
	ある日、蛙を捕まえるんですよ。(JNS-F01: 4)	登場人物の動作の結果

評価	“あ、バッドエンドになるかもしれない”って思ったんですけど。(JNS-F18:63)	話者や登場人物の意見表明
	すごい喜んで。(JNS-F01:6)	話者や登場人物の心的表明

評価表現の抽出は、Hunston & Thompson (2000)の「比較性」、「主観性」、「価値観負荷性」という評価表現の3特徴を基準として、これらを含む表現を抽出することとする<sup>6)</sup>。また、評価表現の抽出範囲は、背景情報節、出来事節、評価節の主要部ではない部分とする。

客観性を担保するために、本稿は評価方略、特に評価表現の抽出基準を捉え直した。改善された点は大きく2つある。1つ目は、抽出基準を評価表現の特徴に絞るという点である。比較性、主観性、価値観負荷性という特徴は、従来の評価表現の言語形式に基づき分析されたものであり、お互いに独立していて、感情状態などの直接的に気持ちや観点を表す評価表現だけでなく、程度などを表すことで間接的に気持ちや観点を表す評価表現も抽出できると考えられる。もう1つは、背景情報節、出来事節、評価節では、評価表現の抽出範囲を主要部以外の部分に絞るという点である。主要部を決めることにより、評価表現を含む部分が分離され、より抽出されやすいと考える。

#### 4.1.2 評価方略の分類基準

評価方略の分類基準には、「言語形式」と「評価の意味内容」という2種類がある。表3は、先行研究で提案された評価方略の分類基準と結果を表したものである。

表3にあるように、評価節の言語形式は、「自分の言葉を引用して、出来事を評価する」、「第三者の言葉を引用して、出来事を評価する」などに分類されている。一方、評価の意味内容の側面では、評価節の分類は「意図、目的、願望、希望」、「内在的な心的状態」などとなっている。また、評価表現の分類は、「数量詞」、「将来形」、「法助動詞」などの言語形式や、「因果関係」、「程度を表す副詞」など内容に関わるものもある。ここから、評価節は言語形式での分類と意味内容での分類が区別されやすいが、評価表現は程度を表す副詞や語彙など、言語形式と意味内容の境界線が不明確な分類もあることがわかる。

表3 先行研究における評価方略の分類基準と結果

評価方略の言語形式	分類基準	結果
評価節	言語形式 (Labov, 1972)	「自分の言葉を引用して、感想や観点を表す節」など
	評価の意味内容 (Peterson & McCabe, 1983)	「内在的な心的状態」など
評価表現	言語形式 (Labov, 1972)	「数量詞」、「将来形」など
	評価の意味内容 (Peterson & McCabe, 1983)	「因果関係」、「程度を表す副詞」、「語彙」など

言語形式は、内容と比べて言語特有の特徴に依存するため、分類基準として普遍的なものではない。また、同じ言語形式であっても、異なる内容を表す可能性がある (Bamberg & Damrad-frye, 1991)。例えば、語彙という言語形式では、感動詞、程度副詞、情態副詞などが含まれている。感動詞は、心的状態を表す手段であるが、程度副詞や情態副詞は、情報を豊かにする手段である。そのため、「語彙」というカテゴリーを設定するのではなく、評価の意味内容を用いて評価方略を分類する方が、学習者の使用実態を深く掘り下げることができると思われる。上記の理由をもって、本稿では、評価の意味内容を基準として評価節と評価表現の分類を試みる。

## 4.2 日本語のナラティブにおける評価方略の分類

本節では、前節で提案した抽出基準と分類基準に基づき、日本語のナラティブから抽出した評価方略とその分類結果について述べる。

### 4.2.1 評価節の分類

「話し手や登場人物の気持ち、観点を説明する節」という定義に基づき、評価節を抽出したところ、以下2種類の表現を含む評価節が見出された。1つは、話し手や登場人物の態度、立場などを表す表現を含む評価節<sup>6)</sup>で、感情状態を表す表現、否定形<sup>7)</sup>、よし悪し判断を表す表現などが含まれる。また、「嬉しい」などの感情状態を表す表現は主に態度や感想を表すもので、「ない、危ない」などという否定形、よし悪し判断を表す表現は主に立場や観点を表すものである。ここで感情状態を表す表現を含む評価節の例を例1として挙げる。

例1 感情状態を表す表現を含む評価節

【ナラティブ1 (JNS-F01)】

- 5. 蛙を捕まえて。
- 6. すごい喜んで。
- 7. もう夜もずーっとこう、瓶の中に入れて。

例1では、「6. すごい喜んで」は「喜ぶ」という感情状態を表す表現を含む評価節である。ここで挙げられたナラティブの一部では、男の子と犬は捕まえた蛙を瓶の中に入れて入れた場面が描写され、評価節が「蛙が好きだ」という主人公の感想を表したと読み取れる。

もう1つは、「引用節<sup>6)</sup>」、「意向形+とする」、「動詞+ことにする」などを含む評価節である。これらの評価節では、引用節、意向形や動詞により、話し手や登場人物の態度、立場、観点、感想が伝えられる。ここで、引用節を含む評価節の例を例2に示す。

例2 引用節を含む評価節

【ナラティブ2 (JNS-F14)】

- 54. で、犬もちょうどそこに戻ってきて。
- 55. いないかなって思ってたら。
- 56. その枝と思っていたのが、実はめっちゃ大きい鹿の角で。

例2では、「55. いないかなって思ってたら」は引用節を含む評価節である。ここで挙げられたナラティブの一部では、男の子が鹿の角を枝だと思い、それを掴んで蛙を探しているという場面が描かれており、評価節は「蛙がいるかもしれない」という話し手の推測を表したものと考えられる。以下、抽出された評価節の言語形式を表4にまとめた。

表4 日本語のナラティブにおける評価節の言語形式

抽出基準	言語形式	具体例 <sup>6)</sup>
話し手や登場人物の態度、立場、感想、観点を表す手段	感情状態を表す表現を含む評価節	すごい喜んで。 (JNS-F01 : 6)
	否定形を含む評価節	でもその間少年はそれに 気づかずに。 (JNS-F15 : 37)
	よし悪し判断を表す表現を含む評価節	“あ、 <u>バッドエンド</u> になるかもしれない”って思ってたんですけど。 (JNS-F18 : 63)
	結果判断を表す表現を含む評価節	あー違ったってなって。 (JNS-M03 : 16)

引用節を含む評価節	“あ、ここいるかな”って思って。 (JNS-F03 : 13)
「意向形+とする」を含む評価節	崖の下に突き落とそうとします<笑い>。 (JNS-F08 : 27)
「動詞+ことにする」を含む評価節	探すことにしました。 (JNS-F16 : 11)

この2種の評価節を、Peterson & McCabe (1983)の意味内容を中心とした基準を参照し分類した。その際、絵本に基づいたナラティブの評価節では、話し手の視点と登場人物の視点が同時に存在するため(Chafe, 1994)、視点の違いを考慮して分析することにした。Labov (1972)は「自分の言葉を引用して、感想や観点を表す」と「第三者の言葉を引用して、感想や観点を表す」という評価節について、自分の言葉に比べて、第三者の言葉がより説得力があると述べている。このことは、話し手が、自分の主張をアピールするために、視点を選んだ上で、評価節を使用する可能性を示唆している。よって、評価方略の使い方とその効果を分析するためには、視点を考慮した「意味内容」の分析が有効だと考えた。

その結果、評価節は「心的状態」、「意見表明」、「意図、目的、願望、希望」、「仮説、推測、推論、予測」の4つに分類された。

心的状態を表す評価節は、感情状態を表す表現、引用節を含む評価節である。例えば、男の子が鹿の体を小さな山と間違えて、鹿が急に動き始めたという場面で「まあ“どうしたどうした”ってなりました。(JNS-M10 : 64)」という発話がなされている。この節では、話し手が「どうしたどうした」という引用節を使用し、登場人物である男の子の視点から今の事態はおかしいという気持ちを述べている。

次に、意見表明を表す評価節は、否定形、よし悪し判断、結果判断を表す表現、引用節を含む評価節である。例えば、犬が蛙を探すために空瓶に頭を突っ込んでいる場面で「まあ、犬はちょっと無意味かもしれないですけど。(JNS-F15 : 16)」という発話がなされている。この評価節では、「無意味」というよし悪し判断を表す表現を使用して、話し手が自分の視点から、犬の行為は好ましくないと判断していることを表している。

また、意図、目的、願望、希望を表す評価節は、引用節、「意向形+とする」、「動詞+ことにする」を含む評価節である。例えば、男の子と犬が家中、そして

家の周りで蛙を探したが、結局見つからなかった場面で「犬と一緒に探しに行く決意をしました。(JNS-F12:22)」という評価節が用いられている。この節では、話し手は「探しに行く」という引用節を使用し、これから一緒に探しに行こうという意図を男の子と犬の視点から述べている。

最後に、仮説、推測、推論、予測を表す評価節は、引用節を含む評価節である。例えば、蛙が瓶の中に入っている場面では、「だから、捕まえたんだろうなって思うんですけど。(JNS-F11:11)」という評価節が用いられている。この節では、「捕まえたんだろうな」という引用節を用いて、蛙が瓶の中に入っているという事実を手がかりとして、話し手が蛙は捕まえられたものであるという推測をしていることが分かる。以上4つの種類を日本語のナラティブにおける評価節の分類として、表5にまとめた。

表5 日本語のナラティブにおける評価節の分類

	分類	視点	言語形式 <sup>(10)</sup>
評価節	心的状態	話し手； 登場人物	感情状態を表す表現 引用節
			意見表明
	良し悪し判断を表す表現		
	結果判断を表す表現 引用節		
	意図、目的、 願望、希望	話し手 登場人物	「意向形+とにする」
			「動詞+ことにする」 引用節
	仮説、推測、 推論、予測	話し手； 登場人物	引用節

#### 4.2.2 評価表現の分類

評価表現は、背景情報節、出来事節、評価節のすべてで出現する。そこで、各節の主要部を除いた部分を評価範囲とみなし、「比較性、主観性、価値観負荷性」という評価表現の特徴を基準として評価表現を抽出し、分類した。

その結果、比較性を表す形式としては、程度副詞と取り立て助詞が抽出された。程度副詞は、程度の高さという側面から予想と事実を比較する言語形式である。例えば、犬はハチの巣にいたずらをしたため、ハチがたくさん出てきたという場面では、「すごいたくさんハチが出てきてしまって。(JNS-F03:44)」という発話があった。ここでは、話し手が「すごい」という程度副詞を使用して、ハチが出てこない、または何

匹か出てくるという予想を、ハチはたくさん出てきたという実際の状況と対比している。

程度副詞のほかに、取り立て助詞も、予想と事実を比較することで事実を強調することができる。例えば、それぞれ蛙を探している男の子と犬が、ほぼ同時に追ってくる動物から逃げるのができたという場面では、「で、なんか、犬の方も、ハチから逃げて。(JNS-F01:49)」という発話がある。ここで話し手は「も」という取り立て助詞を使用して、各自で行動していた男の子と犬は同時に逃げるのが難しいという予想を、ほぼ同時に逃げられたという実際の状況と対比している。また、話し手の予想は、社会の標準的な状態または行動の規範に基づいたものとなる。

次に、主観性を表す言語形式としては、2種類の言語表現が抽出された。1つは、感動詞、感情状態を表す補助動詞など、直接的に話し手の主体的反応を表す言語形式である。例えば、犬がハチの巣を見つけた場面での発話に、「わー、なんだあれは」と、なって。(JNS-F14:36)」がある。ここでは、話し手が「わー」という感動詞を用いて、犬はハチの巣に興味があるという気持ちを表している。また、男の子と犬が崖から落ちた場面でなされた発話に、「んー、その犬と少年を崖の下に突き落としてしまいます。(JNS-M02:26)」がある。ここでは、話し手が「～てしまう」という補助動詞を使用して、男の子と犬が崖から落ちたことは残念であるという気持ちを表している。

主観性を表すほかの言語形式としては、因果関係を表す接続詞・接続助詞、オノマトペや情態副詞など、事柄の関係や状態を描写することにより、話し手の主体的反応を表す言語表現もみられた。例えば、夜、蛙がふたをしていない瓶から逃げ出した場面での発話に、「でも、まあ、上の瓶のふたをしてなかったから。(JNS-M10:12)」と「蛙が脱出して。(JNS-M10:13)」がある。この2つの発話では、「から」という因果関係の接続助詞を使用して、瓶のふたをしていなかったことが蛙の脱走を招いたという話し手の見解が示されている。また、蛙の子供達が木の後ろから出てきた場面では、「で、さらに、こう子供蛙が1匹、いっぱいびよこびよこ出てきて。(JNS-F11:98)」という発話がある。ここでは、「びよこびよこ」というオノマトペを使用して、蛙の動きが軽やかであるという話し手の印象を描いている。最後に、犬が木にあるハチの巣で遊んでいる場面では、「ワンちゃんまだ木にこだわっていて。(JNS-F17:41)」という発話のみられた。ここでは、「まだ」という情態副詞を使用して、話し手は犬が木に興味があると考えていることを表している。

最後に、価値観負荷性を表す表現としては、価値判断を表すモダリティ表現が抽出された。例えば、蛙が家族と一緒にいる場面では、「で、それで、まあ、さすがにね、お父さんの蛙を、お父さんを奪うわけにはいかないということで。(JNS-F01:77)」という発話がある。ここでは、「わけにはいかない」という価値判断を表すモダリティ表現が使用され、家族のお父さんを奪うことは適切ではないという判断が示されている。この際、適切であるかどうかの判断基準は話し手の価値観を表している。表6は抽出された評価表現の言語形式をまとめたものである。

表6 日本語のナラティブにおける評価表現の言語形式

抽出基準	具体例 (言語形式)
比較性	すごい (程度副詞) ; も (取り立て助詞)
主観性	わー (感動詞) ; ~てしまう (感情状態を表す補助動詞) ; おそらく (陳述副詞) ; かな (不確かや推定を表す副助詞) ; みたい (真偽判断を表すモダリティ表現) ; ような (様態を表す表現)
	から、それで (因果関係を表す接続助詞, 接続詞) ; けど、しかし (逆接関係を表す接続助詞, 接続詞) ; ぴよこぴよこ (オノマトペ) ; たくさん (数量詞) ; まだ (情態副詞) ; どんどんどんどん (繰り返し) ; 逆鱗 (誇張またはメタファーの意味を持つ表現)
価値観負荷性	わけにはいかない (価値判断を表すモダリティ表現)

これらの評価表現の中には、表現自体に意味があるものと、主要部の一部に付加されて意味を表すものがあるため (Conrad & Biber, 2000), この点についてさらに検討する。

まず、その評価表現だけで、話し手や登場人物の気持ち、観点を表すものを、「心的状態」と「意見表明」に分類した。心的状態は、感動詞と感情状態を表す補助動詞によって表される。例えば、「あ、蛙のカップルだ”って思ったら。(JNS-F03:79)」という節では、「あ」という感動詞が男の子の発見や驚きという気持ちを表している。意見表明には、価値判断を表すモダリティ表現が用いられる。例えば、「守るべき家族がいたら。(JNS-F05:40)」という節の、「べき」という価値判断を表すモダリティ表現は、家族の一員として、ほかのメンバーを守る責任があるという話者の判断を表している。

また、主要部の表現に付加され、話し手や登場人物の気持ち、観点を表す評価表現を、「発話態度」、「情報補足」、「事柄の関係」に分類した。発話態度は、命題の確信度を表す表現で示される。例えば、「枝みたいなのがあるんですね、そこに。(JNS-F14:51)」という節では、「みたい」という様態を表す表現によって、そこにあるものは枝であるという命題の確信度が表されている。情報補足は、命題を表す内容に対する補足的な説明である。例えば、「すごい対抗するんですけど。(JNS-M10:75)」という節では、「すごい」という程度副詞によって、対抗するという動作の程度が説明されている。また、事柄の関係は、命題間の因果関係や逆接関係を表す表現である。例えば、「で、お部屋の中にいないというのが分かったので。(JNS-F03:18)」と「男の子が窓開けて。(JNS-F03:19)」という二つの節では、「ので」という接続助詞によって部屋の中にいないという命題と、男の子が窓を開けたという命題との因果関係が表されている。

以上の分析をもとに、日本語のナラティブにおける評価表現の分類を表7にまとめた。

表7 日本語のナラティブにおける評価表現の分類

	分類	具体例 (言語形式)
評価表現	心的状態	わー (感動詞) ; ~てしまう (感情状態を表す補助動詞)
	意見表明	わけにはいかない (価値判断を表すモダリティ表現)
	発話態度	おそらく (陳述副詞) ; かな (不確かや推定を表す副助詞) ; みたい (真偽判断を表すモダリティ表現) ; ような (様態を表す表現)
	情報補足	すごい (程度副詞) ; も (取り立て助詞) ; ぴよこぴよこ (オノマトペ) ; たくさん (数量詞) ; まだ (情態副詞) ; どんどんどんどん (繰り返し) ; 逆鱗 (誇張またはメタファーの意味を持つ表現)
	事柄の関係	から、それで (因果関係を表す接続助詞, 接続詞) ; けど、しかし (逆接関係を表す接続助詞, 接続詞)

以上、本稿は日本語のナラティブにおける評価表現を抽出し、意味内容を基準に分類を行った。

本稿では、評価表現を表す言語形式をより厳密な基準を用いて抽出し分類した。先行研究では、評価表現は内容を基準に分類されていたが、言語形式と意味内容の境界線が明確ではないという問題が残されてい



た。これを解決するために、本稿は評価表現を単独で意味をなすものと、主要部に付加することで意味を表すものに分けて、意味内容を分類した。これにより、コーディングにおける恣意性を排除し、より客観的で信頼性の高い評価が可能となると考える。

## 5. 日本語教育への示唆と今後の課題

本稿で得られた知見は、日本語母語話者と学習者における評価方略の使用実態を分析する枠組みとして使用できる。このような評価方略の分類を枠組みとし、母語話者の評価方略の使用実態を分析した上で、日本語学習者の評価方略の使用を分析すれば、使用頻度、言語形式、談話効果などの側面における学習者の問題を解明することができると思われる。

一方、本稿では、背景情報節、出来事節、評価節の評価表現をまず抽出したが、このこと自体が本稿の限界にもなる。具体的には、背景情報節と出来事節、評価節の主要部以外の部分から評価表現を抽出するという方法では、評価表現が抽出されやすい反面、分析対象となる評価表現の範囲が制限される可能性も否定できない。そのため、日本語のナラティブにおける評価方略の分類を全て網羅しているといえるかどうかについては疑問が残る。例えば、「何かに関わっている」ことを表す言語形式として、「助ける」と「干渉する」があるが、これらは同じ行為に対する話し手の判断の違いを示している (Hunston & Thompson, 2000)。また、「鹿の角を掴んだ」と比べて、「掴んだのが、鹿の角で」という分裂文は目的語である「鹿の角」を強調している。すなわち、本稿で取り上げられた分類には、文脈や意味のニュアンスなどによって評価効果を果たす評価表現が含まれていない。また、ジェスチャー、ストレスなどのパラ言語も本稿の分析対象としていない。

今後の課題として、個人談など評価方略の多様性がみられるナラティブを調査対象とし、より総合的、柔軟的に評価方略の分類を考察することが挙げられる。

### 【注】

- (1) 話し手の緊張を緩和させるため、絵本の内容に入る前に、数分間の雑談を入れた。
- (2) 聞き手1人につき、2つまたは3つのナラティブを聞いてもらった。
- (3) 本稿では、ナラティブを節に区切る際、意味内容を重視した。「今日は晴れると思う」の引用節（下線の部分、以下同じ）、「りんごをもらった人は彼

だ」の名詞修飾節などの従属節は、主節と内容上の関連性が高いため、主節に含めて分析した。また、言い間違い、言い淀みなどは原則上1つの節として認めなかった (Foster & Wigglesworth, 2000)。

- (4) 「JNS-F11:3」の11は会話番号を、3は行数を表す。
- (5) 評価方略が2つ以上の特徴を有する場合、最も際立つ特徴を優先して評価方略の抽出基準とする (Hunston & Thompson, 2000)。
- (6) ただし、「真剣に探してくれるんですけど。(JNS-F18:21)」などの発話文では、主要部が「探す」という出来事であるため、「真剣に」という態度や立場などを表す表現が含まれていても、評価節として抽出しない。
- (7) 否定形は、ある事柄が話者の目標や特定の基準に基づいた予想に合わないことを示すため、話者や登場人物の立場や観点を表していると判断できる (Labov, 1972; 関崎, 2013)。
- (8) ここでの引用節には、感情状態を表す表現、否定形、よし悪し判断を表す表現などが含まれていない。
- (9) 感情状態を表す表現など、話し手や登場人物の気持ち、観点を表す言語形式は下線で示す。
- (10) 表5の言語形式では、「を含む評価節」は省略した。

### 【引用文献】

- (1) 烏日哲 (2012) 「中国語を母語とする日本語学習者の語りの談話における表現と構造—日本語母語話者との比較を通して—」一橋大学、博士論文。
- (2) 小口悠紀子 (2017) 「談話における出来事の生起と意外性をいかに表すか—中級学習者と日本語母語話者の語りの比較—」『日本語／日本語教育研究』8, 215-230。
- (3) 関崎博紀 (2013) 「日本人大学生同士の雑談に見られる否定的評価の言語的表現方法に関する一考察」『日本語教育』155, 111-125。
- (4) 辻弘美 (2013) 「女子大学生による子どもに向けた絵本の「語り」: 養育者の絵本の語りにおける評価方略の検討に向けて」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』3, 55-61。
- (5) 南雅彦 (2005) 「談話 (ディスコース) 構造の発達」岩立志津夫・小椋たみ子編、『よくわかる言語発達』第II章, 54-57, ミネルヴァ書房。
- (6) Bamberg, M., & Damrad-Frye, R. (1991). On the ability to provide evaluative comments: Further explorations of children's narrative competencies.

- Journal of Child Language*, 18(3), 689-710.
- (7) Chafe, W. (1994). *Discourse, consciousness, and time: The flow and displacement of conscious experience in speaking and writing*. Chicago: University of Chicago Press.
- (8) Conrad, S., & Biber, D. (2000). Adverbial marking of stance in speech and writing. In S. Hunston & G. Thompson (eds.), *Evaluation in text: Authorial stance and the construction of discourse* (pp. 56-73). Oxford, UK: Oxford University Press.
- (9) Foster, P., Tonkyn, A., & Wigglesworth, G. (2000). Measuring spoken language: A unit for all reasons. *Applied linguistics*, 21(3), 354-375.
- (10) Kuntay, A., & Nakamura, K. (2004). Linguistic strategies serving evaluative functions: A comparison between Japanese and Turkish narratives. In S. Strömquist & L. Verhoeven (eds.), *Relating events in narrative (vol.2): Typological and contextual perspectives* (pp. 329-358). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- (11) Labov, W. (1972). *Language in the inner city: Studies in the Black English vernacular*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.
- (12) Mayer, M. (1969). *Frog, where are you?* New York: Dial Press.
- (13) Minami, M. (2004). The development of narrative in second language acquisition: Frog stories. *Studies in Language Sciences*, 3, 123-138.
- (14) Peterson, C., & McCabe, A. (1983). *Developmental psycholinguistics: Three ways of looking at a child's narrative*. New York: Plenum Press.
- (15) Hunston, S. (1985). Text in world and world in text: goals and models of scientific writing. *Nottingham Linguistic Circular*, 14, 25-40.
- (16) Hunston, S., & Thompson, G. (2000). *Evaluation in text: Authorial stance and the construction of discourse*. Oxford, UK: Oxford University Press.